

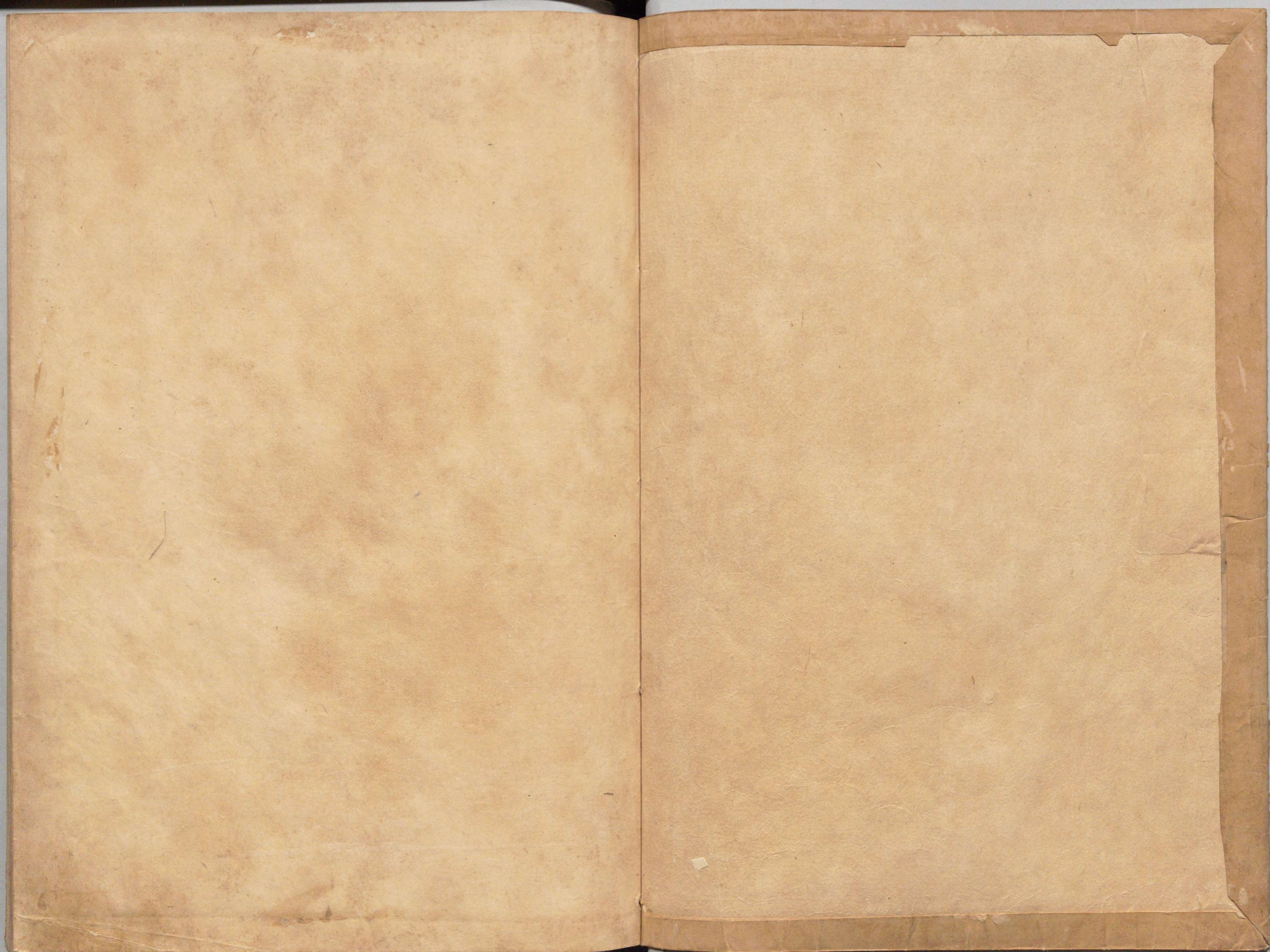
寛永諸家譜

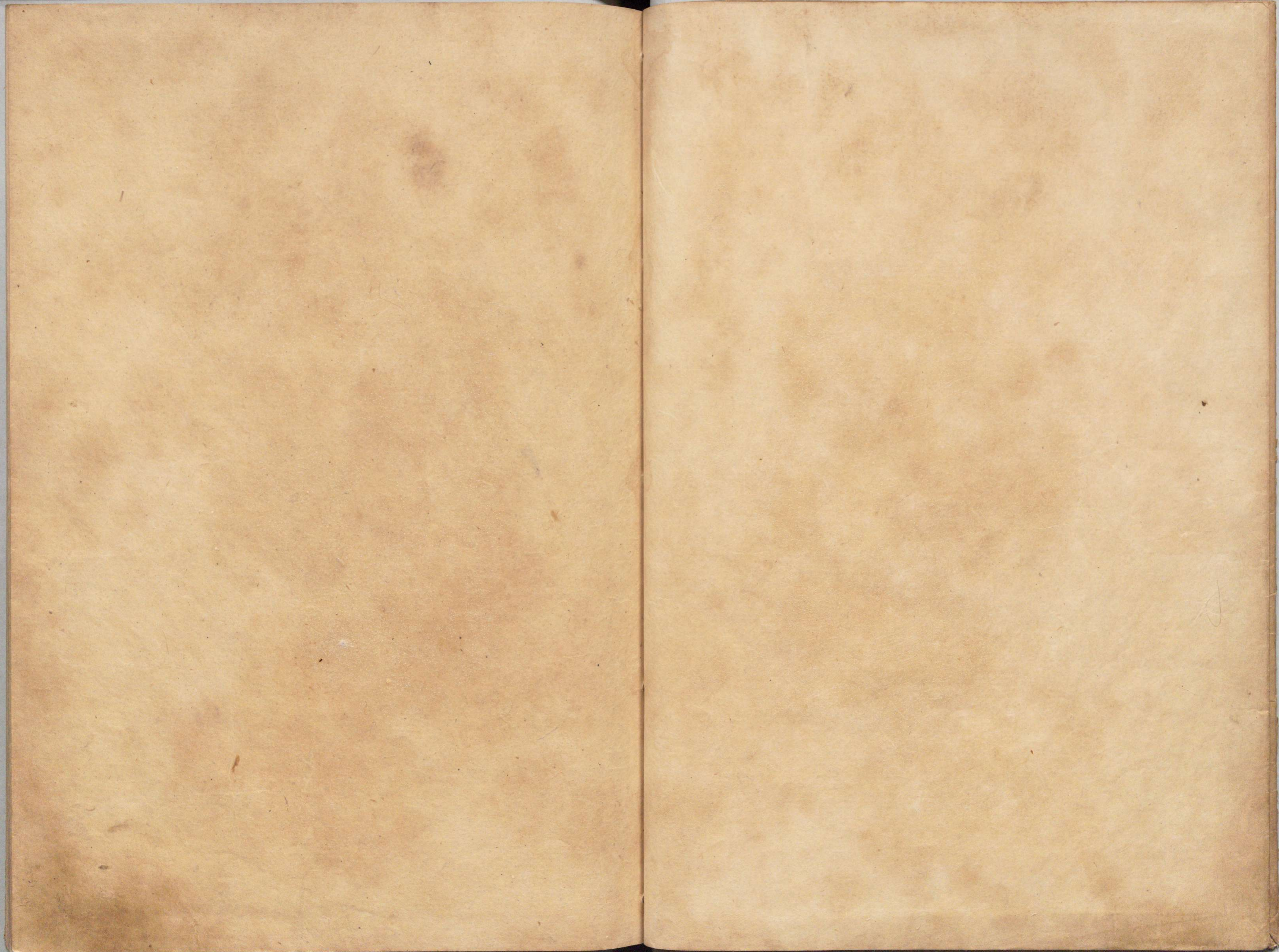
清和源氏已三冊之内
頼季流

35

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186(35)		
函號	特	76	1







保科

井上

寛永諸家系圖傳

清和源氏

己二

頼季流

保科

信濃源氏井上揚祐助頼季が末系

たわ

正則

基正郎

源正忠

筑後守

浅草文庫

信州之井部保科少く生所

正俊

基正郎 彈正忠 後わくはく筑おち

とある信州伊奈郡をさし生所

信玄勝頼二代へつるをく教家の名

之十七ヶ度あり是よりして信玄勝頼の

感状教通あり

文禄二年死云八十三歳

正直

基正郎 然前 後彈正忠と号す

生國日前

信玄勝頼二代へ教度の忠良あり

天正十年

東恒人控現甲州新府へ沙打入の事

小田原氏西大軍と引おくと上野より

碓氷とらえ甲州へ押し七島陣の時

正徳信別言遠よりあつてを為すものと
心とあつて味方よりあつて
酒井氏と對方まぐ所いといつて
中上よりあつて感ありて伊奈半郡
領知とすの由未だ承領も
今度被對南方より下る忠信と旨
酒井左衛門尉被落寛心神妙と
至也早建於手あふ伊奈郡半分
可お至事不可を相遠承は旨

可被抽軍忠と状如件

天正十年

十月廿四日伊奈郡

保科越前守殿

同年伊奈郡言をの成り乞われ
今より後次第高札親同被其情
誠部とくこれありて正徳
此いといつて

大権現の御旗下にけりて

中河の守りこころいふも回らざるにわすれ
つら枝地へ押寄三日せあ戦く箕輪の城
と繁水家

同十二日七月二別あり

大権現御妹と正並よ下るれ

同年九月本居此内書籠の城へ

大権現御手巻の時菅沼小太郎此かり

伊奈孫治の侍とゆきしゆい枝城と

新流一変よ秀吉より枝治の多勢

とよか一帯一かど地形り三
對陣あもどして引寄せとては敵後
よとよぶとて正並よりとて軍
をまけよとてかへ

同十三日

大権現信則其回へ御手巻の時正並と

くいせり其回西房与居城へとて

忠切とてけし家来此の教

つら死と

同年極月三日小笠原右左衛門尉貞孝三
千の場と引わく正重が居城を（お）
くすふの事は合戦と受け酒一の敵
殺多うらうらゆ（貞孝）級軍と（お）
く乞と進う此時

又極現より御鷹の御感状を（お）包永
の御腰地と御領と
今後小笠原右左衛門尉全道（お）
表お働（お）進一敵敵地一（お）

右表多被付捕由酒井左衛門尉
所へ（お）包永（お）
包永（お）
右表門尉（お）

十二月十日御互判

保科源五郎

月十七日甲州守山より洛陽大佛の尺
本と（お）甲州守長ちの御成
御善徳と（お）

月十八日小田原陣に侍
月十九日奥州陣に侍
慶長六年六十歳に死す法名
天園透公

正光

肥後守 与四日前 初は甚高
天正十一年何れ
又於現と様一とあり 後府に取ると

月十二日

大於現秀吉と尾張の小牧に水兵の
時軍切とてけす

同十八日小田原陣に侍

月十九日

大於現奥州に御殿向の時侍一三郎

まゝくゆとひく

又祿元とて言舞陣の時名古屋まで
侍奉

同二年後五位下よごごに叙し

弘長六年上こうちやう校こう京橋きやうきやう謀叛ぼうはんの時とき下した野の

圃う小山こやまままくく付つけけななししるるをを列れつ

淡たん松しょうのの沙さ城じやうととあありりるる石いし田た之の城じやうにに退たい

治ちの後のち越えつ前ぜん小このの庄しやう御ご城じやうにに處ちよととすす

圓えん中ちゆうのの事こととと沙さ汰たとと

同八年どうはちねん森もり太たいをを玉たま替かひひつつきき佐さ列れつ川がわ中ちゆう

治ちののううらら松しょう城じやう飯いひ山さん長ちやう沼ぬま牧まきのの治ち橋はし前ぜん

山さん又またヶが下したのの沙さ城じやう沙さ番ばん二に月げつ十じゅう月げつ

ままぐぐおおつつとと心こころ

同十どうじゅう

名な酒しゆ院いん致ち於お軍ぐん官くわん下したのの時とき付つけ

月つき十じゅう一いち年ねんにに戸と御ご印いん丸まる石いし直ちやく水すい善ぜん清せいとと所ところ

心こころ

月つき十じゅう六りく年ねんにに御ご海かい山さん善ぜん信しんのの時とき雨あめ升あがり在あるる

尉ゑい々々ををめめくくおおつつとと心こころ

月つき十じゅう九きゅう年ねんにに大だい攻こう御ご陣じんのの時とき後のちをを奉ほうじぎ

其その後のち佐さ行ぎやう義ぎ宣のり後のち後のち今いま後のちのの元もとかかへ

恒子つねこしりてめしと侍

文和元年大坂事おおい礼の時こと琳原りんげんを以もつて

くみ少く御先ごさきよりくりにて天子てんしと表あらわ

ゆく合戦あはせとしげ家来けらい此者このものとあま

討死うちし

同二年 鈞命きんめいよりくみ 頼房よりむねの王を

條じょうの御城ごじょうより香か一郡いちぐん中なか此仁このに也なり

お侍おまへとむ

同三年

台たい酒院しゆゐん殿でん御上洛ごじやうらくの時とき侍まへ

同六年大坂御城おおい西番さいばんとつとむ

同九年

將軍家しやうぐんよりくみ御上洛ごじやうらくの時とき侍まへ

大坂御下向おおいのみよりくみ伏見ふしの御城ごじょう

西番さいばんと侍まへ

寛永三年二條御城にじょうへ 行幸ぎやうきやう

御氣内ごきないの侍まへ

日光山にっこう社しゃ氣きの時とき西番さいばん御侍ごまへとつとむ

介信列伊奈部より我本と知を明
急深より久ふ事三ふび父は戸橋田
法橋より下の沙門書とつとつと
月八年七十一歳にて死す 法名信光
道義

正重

親貞

女子

星田筑前守室

母古

大於現此御妹より下六人の一版

女子

板部橋津守書

正貞

喜四郎 淳正忠

大於現御前より幼少此時より

行々

享長七年

右酒院殿一所ノ人ナリ

同十年後又位下ノ叙ト

同十九年又改御侍ノ侍ナリ

御命ニシテ御侍ラモ又御侍ノ御

御書トシテ

文和元年又改御侍ノ時伏見ノ

御前ノ林原遠江守兄正之

小守カシテ御先ノ

侍ラシテ天王寺表ノ先路ト

く川一其後天王寺ト八九所

ナリト小笠原共初ノ捕考

少ク流トナリ首級トシテ

之ケ所流地一トナリ

之トナリ秀政ト正員ト

いトナリ西ノ子孫

少ク百餘トナリノ叙ト

ト討取進ラシメ陣ト

大控

右院殿と度の合戦に法軍が

河とくわぬまの河正貞房

小玄とす

元和三年

右院殿河上洛の時侍有

寛永七年七月 約命に

大御妻頭と

同八年八月より翌年八月まで

大坂御番と

同十一月河上洛の時侍 遠御已後

日光湯社系の河と御侍と列す

同十二月四月より翌年四月まで

系二條山城御番と

同十四年八月より翌年八月まで

大坂御番と

同十七年四月より翌年四月まで

二條の御番と

女子

小太夫和守室

女子

お辰式部少輔室

氏重

小原お羽守

系湯別よふれあり

小原左衛門つちまき雲子とちり

正英

之水

正之

肥後守

後五位下

寛永九年十二月廿八日 御命よつて

お品一叙と

同十一月御参内し御伏せし御命

よつて侍候し御命

同十三年七月信州より遠く御命

出羽の個山形へい〜く湖加沼うみお領すのり

同二十年七月し官上くわんじやうをわを〜を終はへ

奥州おくしゆ倉津くらつの城しろととままふふ巾きん加沼かづあり

家紋いへ九耀くわう鏡かがみのの葉は

● 集

井上いの上

和名わな河部かべ氏うぢなりなり井上いの上氏うぢ名な
掃部さうぶ助すけ源みなもと頼季よりゆきがが後ご流りゅうちちわわ

河部かべ大おほ龍りゆう少すく輔すけ 法名ほふな真ま海うみ
法康ほふかう志し廣ひろ忠ただ卿きみ

東也あづま大おほ権けん現げん一ひと所ところ命いのち年とし一ひと所ところ法ほふ中ちゆうとと河か部べと

寛永十八年

將軍家と評と

正友

松平屋尉

牛園家

享和十七年死

法名法吟

正勝

内通助

元和五年

將軍家と評と

寛永三年病氣より死す

同十八年死 法名日榮

正親

教馬

正就

牛九郎 主計次 牛園家

天正十七年死

台渡院殿と稱しなくす門

元和元年三月廿七日、後五位下よごのかげの叙き

白針しろののの任にじ

同日、鉤えん命のみこと小こりり年とし終つひ人ひとのの列りと

同八年、聖別せいべつ換か領りやう賀が城じやう、五ご万まん二に条じやう

ふと好領と

寛永五年、卒しゆうと五十二歳、法名ほふな日に操そう

忠源院と号ごうと

政重まさしげ

清長きよなが少尉せうゑい 筑後守ちくごしゆ 牛酒うしざけ日に前まへ

孝長たかなが十三じふさん年とし卒しゆうと

台渡院殿へ任じしと

元和元年

將軍家へ出仕し

寛永四年、任じ位下よごの叙き、筑後ちくご守しゆ

任じ

同十年、大目付おほめづりの役やくと、作しやう付づと

同十七年徳列一 おわく一 万石と

存銀と

同月別はゆふとけりぬりて

ちぐくあつては還一 肥あつ

長橋よりしき夫玉の高船をひ

那縣禁制等の事を裁許と

同十九日 納命とゆりて海

法民の慈者の事とゆりて

同二十日 八月二十日 三巻と加へ

政次

清長藩尉 七回武列

元和四年

將軍家とゆりて

寛永十四年 肥前藩尉とゆりて

蟬起と望みの義政を上げて

後向の時政次とゆりて一 檢つて

政清

内記 生玉日記

寛永十九年

將軍家と縁多し

政實

水十郎 生國日記

寛永十九年

竹子代志しつる

政則

源流 生玉日記

寛永十九年

竹子代志しつる

集

源八郎 生玉日記

正利

大学物 河内守 生國日記

元和三年

名 徳院殿

將軍家と稱し、たゞくも門家

同九月八月六日、後五位下、叙一河内守了、仁也

寛永五年 修より、く家督と

は、又、き、海と領也

正義

常力 生國同前

寛永五年

名 徳院殿

將軍家と稱し、たゞくも門家、野別、西、方、此、名

よ、お、わ、く

名 徳院殿、ら、五、子、之、の、地、と、稱、領、と

女子

松平伊豆守信綱が妻

女子

本多伊豆守忠利が妻

女子

久世三河郎廣常のりひらの書

女子

須久すくま日向守安長やすながの書

女子

水野監物忠長ただながの書

女子

酒井山城守重澄しげあきの書

女子

稻垣平三郎為門ためかどの書

正仁ただひと

大學助だいがくすけ 七回ななかいの書

寛永十六年

將軍家しんぐんけの書

集 たぐ

うしな
之 秋 物

十 四 日 所

その
家 紋 井 樹 け

賴義

伊豫守

鎮守府將軍

賴隆

河内守

鎮守府將軍

升上

頼季 よりよ

し葉之郎 しよし

俊五郎下 しよごろうげ

酒實 しよじゆ

升上之郎太郎 かひしん

光平 みつひら

時田太郎 ときでん

光長 みつなが

桑刺二郎 くわさ

清長 しみず

同五郎

忠長 ちゆなが

矢升守太郎 やのりもり

源長 げん

升上八郎

長基 ちゆきち

小石郎 こいし

長実 ちゆじゆ

五郎

長政ちやうせい

玉圃たまのぼ

源右げんえ

九郎太郎
けり中絶

清之きよの

孫太郎

播磨伯人

之正のちやうせい

孫太郎

同伯人

之房のちやうぼう

孫太郎

因防守

筑前

一道路

号

天文二十三年播州非海におひく生取

黒田有吉備筑前長政志

あづま軍切とけり新征代

の何れ死忠とぬらん

慶長五年豊後連見郡立石におわく
黒田如水と大友義流とてふ時
大友の軍将は石廣かき束とふあつね
は武勇のなまれあつて思ねやして
せは然ふ之房もついでに石廣
と討つる所大友が惣軍やふまこと
義流といけども
同六年之房に洛に如水とてふ
伏見におわく

大権現と評し多くもつたなり
筑前守名代として石廣は素前
石廣院敵と評し石廣之房を以て
功と感し石廣はかき束とてふ
上意とてふ少くも麻毛の良馬とねん
寛永十一年十月廿二日死に八十一歳

庸名

石廣守 七回奉命

十、三歳の時

右近衛殿と御一をうつくしき通勢とあら

奉長十五の三月廿二日後又位下下の叙

後海老守と御一

庸尾

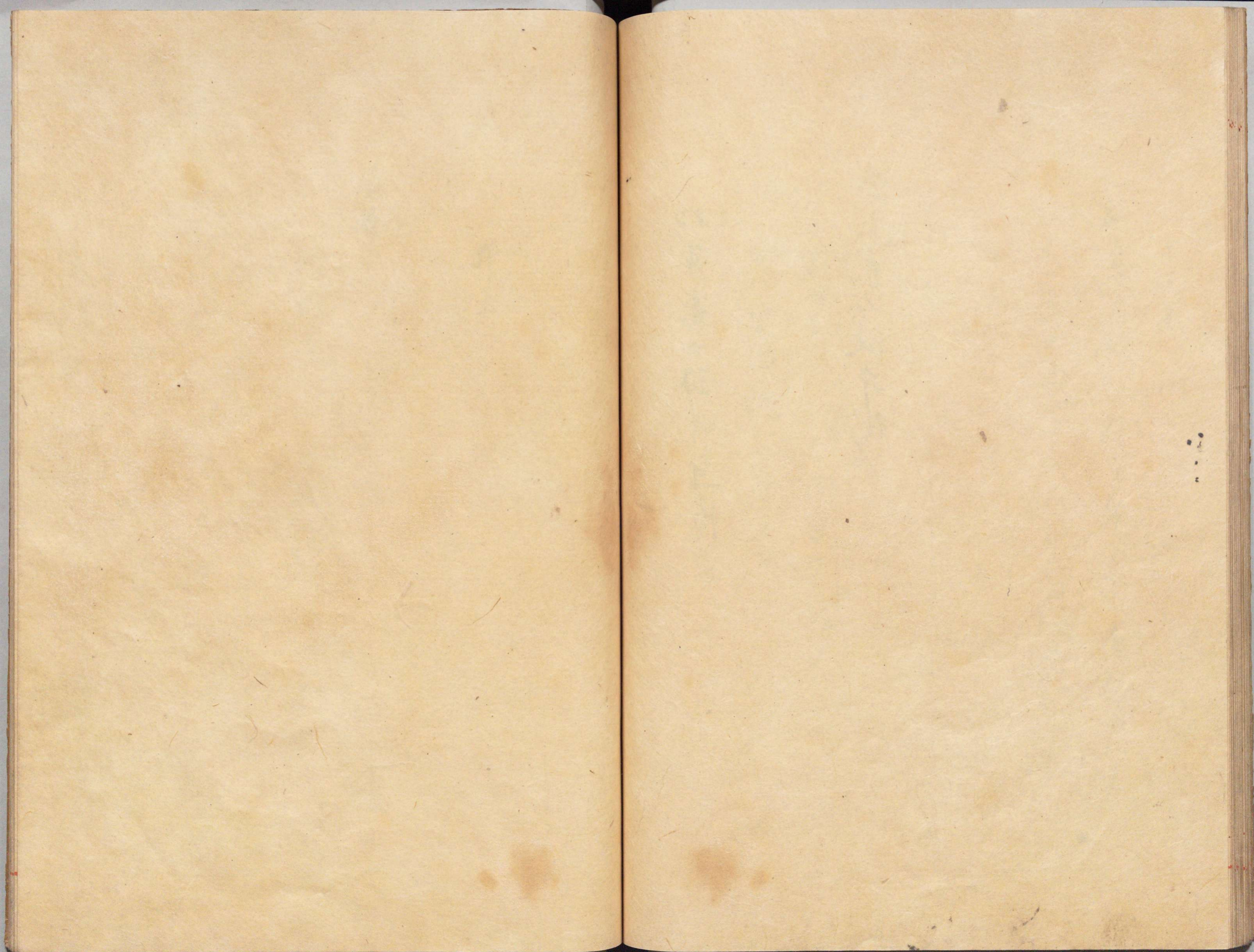
頼母助 たのしき 七國武列しちこくぶりつ

母、黒田筑前守くろだちくぜんしゆの女むすめ

寛永十七年二月

お軍家と御一をう

家の紋井樹



升上のぼり

貞安まことやす

修理亮しゆりりやう

上田信則升上村かみのうえののぶのりまのむら

憲安のりやす

但馬守たにまのり

上田三則かみのうえののぶのり

遠州磐川の珠代初比奈俊伸守とんずのいわたのたまよのつひなゆののぶのり

憲勝

嗣一其後相別小條氏改一つ又
松田尾張守一とて大馬分代と
し六十歳一病死 法名道徳

次郎重隆 一國相別小田原

松田長守助一守と

文禄三年二月

東照大権現一守とされ御納戸と

信行

名徳俊敏御代まゝ太の役とつと

將軍家より太の役と承り免大御

書と信行一守

憲行

源右衛門 一國相別小田原

寛永十六年七月

將軍家一守とされ又御書御代と

家^{そのま}紋^ま
二^に
拍^{ぱく}

● 賴信

河内守

鎮守府將軍

升上

此系高宮本ととも
正徳が拆る所と
よ

賴季らいき

掃部助さうぶのすけ

從五位下じゆごいげ

井上いの上号ごう

從五位上じゆごいじやう六部むくとと領りやう

海實うみざね

三郎さんらう太郎たうらう

克平かつへい

克長かつちやう

右馬頭みぎうまがしら丹波たんぱ守まもとと領りやう

又次郎またじらう

清長きよちやう

忠長ちゆうちやう

經長きんちやう

五郎ごらう

太郎たうらう

八郎はちらう

長基ちやうき

長實ちやうじつ

小太郎せうたうらう

兵九郎へいくわんらう

長教ちやうきやう

真圓まゝん

九郎くわんらう太郎たうらう

源太郎げんたうらう

正正しんせい

長冬郎

正實しんじつ

長冬郎

正貞しんてい

九郎くわうらう 康正かうせい年中なちゆう播磨はりま福井ふくい庄しやうと領りやうと
くわいの丹波たんぱの領りやうと

正長しんちやう

正直しんじつ

九郎くわうらう

九郎くわうらう

正行しんかう

九郎くわうらう

天文てんぶん三年さんねん九月くわがつ十二日じふににち播磨はりま赤山あかやま合戦がくせんの
時とき討死うちにかし五十一歳ごじゅういちさい 法名ほふな紹覚しやうかく

正信しんしん

九郎くわうらう 永正えいせい十一年じゅういちねん播磨はりまの生なまれ

教代攝東饒ぬのぬ那の内と領ど
攝東の城は居して後英賀の城は後
信也
天正のうへに織田信長播磨に發向せん
やらのうへとて正信播磨に所々の城
之におろりて援兵と乞利輝えとて
輝え後巻とせんといふと英賀の城
要害の地なりとて城と深く一壁
と堅くしておのくたくごりて防戦

とて

同六月秋白城分信忠と長臣秀吉と
同く信長の命に依りて大軍とてわく
播磨に發向して津名志加ぬのぬ城と
攻落して信忠系は油津一秀吉と播磨
にさあせんとて所々の城とせんといふ
こゝに依りて御着の城は小寺友成と
和の城は三木左助町伴成と海上深草
寺法士と同一く英賀の城は川野と

小寺宿を築城の城を建て秀吉は後と
ふゆへ秀吉は城の城に入りて秀吉は
兵英賀の城とせしむ城一方はありこれ
よむ附城と二方より入るよむと三門と
柵とよむけしむの城をよむ攻入る
といつて城をよむ秀吉は内通の者あり
く城中にて火のよむとあぐりよむと城
中の士卒やわくわけきて城をよむ
おらんとも秀吉は附城とよむ五

六可なるて津とよむあは山とよむ
高よむ道とよむせりりやと城をよむ
守く城をよむか張して教所防戦
はわく津とよむけしむ秀吉は書とよむ
つげく道とよむ拓くも城をよむ

播磨必死に兵英賀領をよむ不可
有お返しと城をよむ張の者よむ被殺下知
津國お傷下被勒津忠高は存知
御朱印一被下知

三月六日

羽軍左衛門

秀吉左判

井上九郎左衛門殿

秀吉左衛門と同必完栗那（？）今我
の時正位我切（？）少人秀吉感状（？）

所

今夜お完栗（？）方働（？）後注進（？）

孫油（？）有（？）少人浅那孫栗（？）

系他州（？）後書付少紙（？）可（？）

所

五月二日

羽軍左衛門

秀吉左判

井上九郎左衛門殿

是下（？）少人英毅（？）の城和隆（？）の時（？）

左物英毅（？）少人少人海上（？）と由（？）

輝（？）えよ少人

秀吉他州（？）後向（？）及（？）一檢（？）

ゆ（？）一旗（？）とわげ（？）事（？）と（？）

廻文（？）と少人少人時（？）中村孫平（？）

と此（？）あり少人廻文（？）と（？）

子狀ど正佐を討略し、くみし深しき
之木左助が孫存する。依りあけ、
くみし
月十一日正月八日病死七十歳は
通喜

正俊

心郎次郎 外記 永禄四年播州
よき家

孝長八年くみし池田千原輝政の
所よ
同月十二月十二日二十三歳で病死
法名通清

正純

九十郎 外記 天正九年
慶長十九年くみし
名酒院殿くみし

同年大坂陣の時酒井正徳忠世は
殿して殿向と敵兵ありて略奪今被
色よ出陣と一馬よ一十月廿六日
要害の先普請と作付る時正徳は
先陣を立ち鉄砲とてりて敵とあ
くすのし終 約命とてりてゆり
り毎日略奪をおとしりて鉄砲と
りより敵つ井は城中一列あり
りて後大筒とてりて城中へはら

入るよのし終 作とけりて敵と
後前略よりり毎日大筒とてりり
元和元年大坂再戦の時正徳又忠世
殿して殿向と忠世は御旗印を候する
右備方の殿と忠世は御右備の先陣
あり五月七日忠世は天守をよびわけて敵
和泉守を略す陣の西へ入敵とてり
し時敵出張して足輕とけりて
りし正徳は陣よりすしとて敵の首

二級とらんとあまうら一級甲首あり
但中の馬上のふらひつりすすみ
事といひて教令を伝へて之より以
味方ゆかくうらとる教も又城中
へ引入る後正徳言前より前首
級と但頭より名けとは但頭より
一連但中の一番首よりうらとる又
あれと持して中陣におよしき
台座院殿も献とて後御陣あり

法士軍功の擢升と相儀
正徳太のいしきと
言上と
元年十二月下徳公香取郡の内
又百石の采地とくまふ
月十日 仰依く歩卒十人
同十日 仰命よりして大筒の鉄炮
百餘挺撃してこれと献と
又古金可
此人筒のも筒れと
利ありと云ふも
きりてきく

いもよのいふ所の十町よのあはる所
さしよとて正徳が製する所の大筒の其
筒よりして是をけらるるいふ家本
をくわする事、まやみくか利
ありとて百人してまの筒に
十人ゆくりりくこまをけ一人して
ころん其りゆりりす小筒此びく
たり鉄炮の筒の筒の筒を製し
ま玉の作りは二百目なり八町より

百十町よりいふ是とてまの筒に
幕の早よりる家此製作の正徳が二
丈とていふなりこの筒よりして
同十町より力五騎鉄炮は約二十人
ありり武州都築郡又相州の内を
二百名のいふか信長にして郡令子
ふとれと
同十七年 河合の依く又五十目玉
百目玉の筒二百挺と製してこれと

又成とさしるる平地の戦うとぬす
る所の兵急とつりて一人して敵十人
と名く術と鍛錬して是と敵と
是人筒之更のちりなり
日十八年正月六日 作よりと命
と名く

家紋丹桐 元ハ桐或ハ鷹合としらせ



